

## 三木稔の管弦楽作品について

梶 名生子

最近の『三木稔、日本史オペラ8連作』の完成もあって、三木稔の作品はオペラがライフワークとして知られているが、実は、20歳でバイエルを弾きはじめ、翌年東京芸大作曲科に入った三木には、「オーケストラのみが音楽だ！」という強烈な意識が30歳まで続いていたという。

その意識は、初期の2作品に纏わる逸話で納得できる。三木の作品一番は23歳の時に書いた《交響的三楽章Trinita Sinfonica》で、その年管弦楽作品で最高の登竜門だったNHK藝術祭管弦楽曲公募で第二位となり、クルト・ウエス指揮NHK交響楽団で初演された。次いで、打楽器10人を含む5管編成、4楽章32分の巨大な《ガムラン交響曲》は、3管25分という応募制限のあるクイーン・エリザベス・コンクールを目指して書き、当然審査対象とならず送り返された。おまけに、岩城宏之が3管に直したらN響でやるというのにノーサンキューと言っただけ。未だに演奏されていないこの作品を三木は第1交響曲だと考えている。

徳島市西部の大きな織物問屋だった生家が、戦中戦後に適応できず破産状態の上に25歳で父に逝かれた。徳島に残っていた祖母、母、弟妹たちに映画音楽の作曲や劇伴の選曲で送金を続ける一方、《ガムラン交響曲》や27歳での結婚後に書き始めた次の交響曲《除夜》も別のコンクールで落選する。折からの無調音楽全盛期に対応する気などさらさら無かったのだから当然であった。

30歳になった三木は、「合唱界」という雑誌の付録用に連続して求められた混声合唱曲の作曲で、録音だけでなく現実にコンサートで演奏される音楽の愉悦に立ち戻り、録音仕事の合間に男声合唱団でアマチュアとして歌うようになる。その縁で33歳の頃に書いた管と打楽器が中心のオケを伴う《レクイエム》は、福永陽一郎や小林健一郎らにこよなく愛され、たびたび演奏され、CDの種類も多い。合唱の人たちには「三木レク」と称される出世作となった。

しかし翌年、34歳の三木が提唱して創立された日本音楽集団や、39歳で創作に関与した新箏（21絃）による、エネルギー的な邦楽器の現代化・国際化運動は、彼からオーケストラ作品創作の機会を奪い、54歳で一時邦楽器から離れるまで、オケへの初心を思う存分遂げられないもどかしさが付きま続いたという。

そんな中でも三木は国際的なエポックメイキング

なオケ作品を残す。まず1968年の《マリンバの時》に続いて書いた《マリンバ協奏曲》。欧米で頻繁に演奏されているこの協奏曲は39歳の時、まだ無名に近かった安部圭子に書いたもので、彼のマリンバ作品の一つの頂点をなす。後にストラトキン指揮のセントルイス響で快演され、その初来日時、これをやらせないなら来ないとマエストロが言った逸話もあるほどオーケストレーションは絢爛と独自性を持つ。三木はこの協奏曲の最終縦線を、時まさにアポロで人間が月に足跡を印した瞬間に引いたようだ。

その直後、前人未踏の大プロジェクトが始まった。1969年《鳳凰三連》作曲開始である。三木は西洋オーケストラと日本の楽器群が一晩を要して共演するこの3部作を1981年に完成させるのだが、その第1作《序の曲》は当時20絃だった新しい箏の門出に相応しく、弦楽合奏に新箏・尺八・太棹三味線を伴う合奏協奏曲を志して、ソロの《天如》とほぼ同時に作曲を開始した。《序の曲》は単独でも方々で演奏され、若杉弘指揮の東京都響は、1991年カーネギーホール100周年記念演奏にこの曲を選んだ。

序の次は破。三木は次の《破の曲》を43歳で書く。このとき《鳳凰三連》構想は作曲者のなかで確かな歩みを始めており、完成後の3連作上演で、オーケストラの定番である「序曲」「協奏曲」「交響曲」のオーダーがもくろまれる。その協奏曲のソロ楽器に、当時もっとも力を入れていた新箏（21絃）を選び、不世出と信じて15年も共同作業をした野坂恵子を登用した。この《破の曲》について評論家 篠田一士は「三木稔の楽器法の最高水準をゆく作品であるばかりか、その本命とする劇的運動が、もっとも凝縮した形で表白された傑作である」と書いている。当時三木と対立していた評論家まで「主義主張を超えて同感する」と表明した。

46歳で親鸞の思想に共感して書いた、合唱入りの《和讃による交響》は数えて第3交響曲になる。次いで仕上げた《春秋の譜》“Symphony from Life”は50歳の作品で第4交響曲。日本の指揮界の重鎮だった渡辺暁雄がとても愛し、委嘱者の京都信用金庫理事長が「初演から日本の古典の風格」と言ったことが話題になった。

《鳳凰三連》を完結させた第3曲（第5交響曲）に着手するチャンスは、三木の邦楽器への献身から自然にやってきた。1978年に三木が企画した日本音楽集団世界一周公演の途中、ライブチッピでの演奏を聴いたゲヴァントハウス管弦楽団の総帥クルト・マズアは、3年後の楽団命名200周年と新ゲヴァントハウス開場記念に向けて、直ちに新作を三木

に委嘱。三木は迷うことなく邦楽器群と西洋オケの「二つの芸術世界」、そして当時西側体制に属した日本と東側体制の東独という「二つの政治世界」の二重の対立を解決して、平和的に融合すべき人類の課題に、36分の大作《急の曲》“Symphony for Two worlds”で応えた。緻密にして豪快な音楽書法のみならず、後に評論家上野晃をして「ベルリンの壁崩壊を予告した」と言わしめた政治的先見性を51歳にして示したことになる。

1994年ニューヨークフィル定期での《急の曲》米初演で、ニューヨークタイムズのジェームズ・オストライクは次の批評を載せた。「かつてリムスキー・コルサコフは『管弦楽法』を書いた。しかし三木稔と聴き比べたとき、リムスキーは憶病者に思える。日本のものであれ西洋のものであれ、殆どすべての楽器が、どこかで素晴らしさを発揮できるように作品が出来上がっている。すべての楽器が、同時に響き合いながら、あらゆる方向に火花を散らしつつ、驀進する。また三木は、東西を象徴させた二つのテーマ音型を示すが、それらを巧みに変容させることで、全曲にわたる統合を保っている。」

《急の曲》の成功と裏腹に、何故か三木は内外からの激しいバッシングの嵐にさらされる。失意の中、54歳で一時邦楽器運動から身を引き、日本史オペラ連作の作曲と、自身創立した「歌座」によるフォークオペラ運動、《マリンバ・スピリチュアル》《ピアノ3重奏曲》《弦楽4重奏曲》など国際的なレパートリーとなった室内楽を書き、牧阿佐美バレエ団委嘱の全幕物バレエ《光の国から》で大オーケストラをじっくりと動かす日々を持つ。一方で

《August1945》《阿波ラブソディー》《序曲日本》などオケの小品をいくつも書き残すことができた50歳代であった。

そしてギネスブックものの60歳代がはじまる。

《ワカヒメ》や《静と義経》のような3管の大オケを使ったグランド・オペラの間生まれた《Z協奏曲》と《舞》は、まさに動と静の対照的な管弦楽曲である。《マリンバ・スピリチュアル》の2人版を700回も演奏したサフリ・デュオのマリンバと打楽器がオケと共演する二重協奏曲を、デンマーク国立放送交響楽団から委嘱された62歳の三木は、故郷阿波踊りのリズム「ぞめき」を徹底する作品を望み、「ぞめき」のイニシャルZをタイトルとする《Z Concerto》を書いてコペンハーゲンに乗り込んだ。バルチック海峡の喉元にあるこの都市から日本海海戦のZ旗を連想したという。そこでの初演はデンマークを代表する現代作曲家3人の新作演奏の後、

最終曲目として行われ、終わるや否や始まった爆発的なスタンディング・オヴェイションが30分近くも続いた放送局の録音が送られてきている。

休む間もなく大阪センチュリー交響楽団の委嘱で2管編成の純オーケストラに捧げた《舞》は、長年邦楽器を知りつくしている三木だから書けた最も日本的なオーケストラ作品だと認識されている。作曲家本人も一番好きな自作の一つという。

1993年から日中韓の民族楽器を組織して始まった三木命名の「オーケストラ・アジア」で96年来日した中国琵琶奏者シズカ楊静をとっさに天才と見抜いた66歳の三木は、翌年長野オリンピックのプレヴェントだった芸術プログラムからの委嘱作品を《琵琶協奏曲》と決定。白楽天の「琵琶行」に想を得た交響詩の側面を持たせ、中国の代表たちに「今後100年、これを超える琵琶協奏曲は現れない」と言わしめた作曲を成し遂げる。彼は最初から西洋オーケストラ版を平行して準備し、99年東京都響が三木作品でサントリーホール定期を行った際にその版を初演。まさに世界最高峰の楊静の技術と音楽性にも助けられて中国はもちろん、米初演、そして日本のさまざまなオケとの共演が続いている。

2000年にアメリカで世界初演されたオペラ《源氏物語》作曲中にも、三木はいろいろな作曲注文を受けた。大作を書き終え、初演に先立つ69歳の終わりにホノルル交響楽団委嘱で作曲してハワイで初演された《Pacific Rainbow》は「さまざまな作曲上の仕掛けが耳に新鮮で、流行のジャポニズムとは無縁」「人々の気持ちを奮い立たせる」と批評された。演奏者たちにも大受けの元気よさと12分の長さを盛り上げるテンポのノリは、平安王朝に立脚する長編オペラ作曲を終えてリラックスした精神状況が生んだのかも知れない。

それに先立つ1997年のある日、クルト・マズアが長距離電話をかけてきた。「ミノル、もうすぐ2000年だよ！」。作曲者はハッとする。実は《急の曲》初演の直後、マズアは三木に次の作品を委嘱していた。すでに三木バッシングが顕在していた中、そのツアーの続きでも信じられないことが起こり、失意の作曲者は自らがツアーに組みこんでいた“ローマの休日”で出会ったフォロ・ロマーノとミケランジェロから、《鳳凰三連》を超える巨大なプロジェクトのインスピレーションを得、マズアに2000年なら実現できると告げ、大賛同を得ていたのである。「源氏の作曲中！とても無理」と小さくなった三木にマズアは、「2000年11月に読売日響との約束があるのだ。第一楽章だけでもいいよ」。それならと応じ、

大作完成後、2000年5～6月の源氏初演のために乗った飛行機の椅子に座ったとたん、天の啓示のように浮かんだタイトルが《大地の記憶》！十数年前マズアに明かした大構想は2時間の《地球交響曲》で、その前半は西洋のフルオケと非西欧の楽器群による、地球の過去から現在にいたる急と緩の2楽章。すべての言語で歌われる声楽を含む後半は別として、第一楽章《大地の記憶》、第二楽章が《風の記憶》なら絶対いける！と確信。

アメリカ滞在中は、たおやかなオーケストラ部分を基にオーラJのために《源氏音楽物語》を書き続け、オペラは「雰囲気を持った傑作」と大満足の世界初演を終えて帰国したものの、60歳台での全力疾走に続き、70歳初頭で期日の迫った厳しい創造仕事は、作曲者の内部を確実に蝕んでいったようだ。

馬頭琴・尺八・中国琵琶・新箏・バリ島ガムラン打楽器（ツインで）というアジアの民族楽器のソリストと3管フルオケが、地球上の過去の記憶、いや記録を引用しながらつづる《大地の記憶》（第6交響曲となる《地球交響曲》の第一楽章）25分は、それだけで壮大な東西交流の申し子として、2000年11月25日クルト・マズア指揮、読売日響のサントリーホール公演で怒涛のような世界初演が果たされた。三木はいつものように客席後部から疾走して指揮者やソリストたちのいる舞台に飛び乗った。

次の日、横浜みなとみらいホールでの公演前に成城の泌尿器科に行った三木は、第3期進行がんに達していた前立腺がんの宣告を受ける。その夜も大成功だった公演とはいえ、微笑んで演奏者や聴衆に直面するのは大変なことであつたらしい。

進歩したホルモン治療のおかげで元気にオペラ第8作《愛怨》を75歳で書き上げ、新国立劇場でワーグナー以外例の無い大オケピット一杯の16型フルオケを鳴らした作曲者が、喜寿の2007年秋、故郷徳島で行われる国民文化祭グランドフィナーレで、フォークオペラ《幸せのパゴダ》と並行して世界初演する《ふるさと交響曲》は数えて第7交響曲になる。日本各地の7つの民謡と民族音楽を創造的に取り込み、中頃に阿波踊りのさんざめきが聞こえる異色のフォークシンフォニーだそう。日本を象徴するサクラサクラに誘われて、まるでミニ第九のように三木那子作詩の《ふるさとの風》が最後に合唱される。徳島に発し、今後は日本各地でアマチュアオーケストラ・邦楽器集団・混声合唱団の共演で、文化の祭りの度に愛奏されるよう作曲者が仕組んだ作品の誕生は、実に今日なのだ！

（父のファイルした資料と対話の後で）

梶 名生子

（かじ・なおこ。三木稔長女。東京音大高校卒。学習院大学哲学科卒。ニューヨーク州立大学短期留学。ジャパン・アーツでコンサート随行通訳を経て、青少年の国際交流、語学教育等に携わる。）